平成２１年度　学校評価　（東能勢小学校）　　№1

（１）心育て※

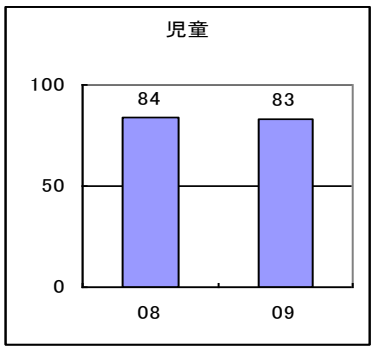
| | |
|---|---|
| ①テーマ | 「心育て」　Aいじめについて（人権教育として取り組む） |
| ②昨年の指摘 | ・日ごろから児童一人ひとり悩み、態度や心の変化、人間関係を的確に把握する努力をし、共感し、児童、保護者との信頼関係を深めるようにされたい。<br>・いじめに対しては早期発見・早期対応、全クラス・全校で取り組んでいくことが大切。<br>・取り組みを保護者へしっかり伝えることが必要。 |

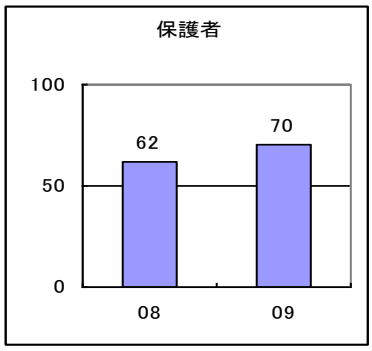
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 仲間と共に育つ豊かな心を育む<br>いじめ不登校ゼロへの取組み<br>○いじめアンケートの実施・分析・対応、児童会の取り組み、事象への組織的な指導の推進。<br>○人権教育を全ての教育活動の基盤において取り組む。各学年での分野別人権教材の学習をする。<br>○元気広場等交流体験活動 | ○いじめアンケート６月上旬実施。<br>○結果、実態を全校で交流して組織的継続的な取り組みを、保護者とも連携して行っている。：現在、悪質な事象の発生なし　発生数も昨年比で減少。<br>○児童朝会、児童会活動等で、「いじめをなくす」ための児童の取り組みが進められている。<br>○児童会行事を継続実施している。<br>「みんなで仲良く遊ぼう」などの行事<br>○学校支援ボランティアと連携して元気広場の活動を実施 |

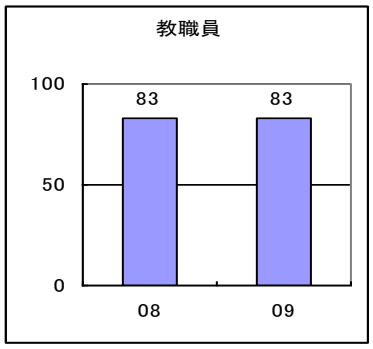
自己評価

⑤自己診断

| 小学校 | 年度 | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (3-2)先生たちは、いじめやこまっていることについてきちんと助けてくれる | 84% |
| | 本年度 | | 83% |
| 保護者 | 前年度 | (3-2)学校はいじめや子どもが困っていることについてしっかり取り組んでいる。 | 62% |
| | 本年度 | | 70% |
| 教職員 | 前年度 | (3-2)学校は、いじめや子どもが困っていることについてしっかりとりくめている。 | 83% |
| | 本年度 | | 83% |




・児童のプラス評価は、ほぼ横ばいで 1%減の 8 割強。保護者 8%増の 7 割。児童の評価結果を見ると、この項目と「先生は、話し合ったり決めたりするとき、子どもたちの意見や気持ちを聞いてくれる。」「困ったことや体のことを相談しやすい先生が、学校にいる。」の項目に共通性の見られるクラスもある。子どもの話を、対集団でも対個人でもよく聞き、丁寧に対応することの必要性を物語る結果であると言えるだろう。
・児童の意見の中に、「(先生に）助けてもらえなかった。」「誰かがいじめられているとき（先生に）そばにいてほしい。」等を記述しているものがあったが、これは、「どちらが正しいか。」というジャッジではなくて、「一緒に考えてほしい。」「気持ちを受け止めてほしい。」ということを示唆しているとも考えられる。また、教師、学校の取り組みについて児童が納得できているかを検証していく必要がある。
・保護者の意見には、「学校の対応はよく分からない。」「学校と保護者がもっと連絡を取る。」「学校全体で取り組む。」「コミュニケーション不足が背景にあるので、情緒的な面も見ていかなくては。」としたものがあり、学校の、学級の取り組みがよく分からない、個々の取り組みにおいて学校の方針が明確に伝わっていないことが、数字の伸びなさ、取り組みへの不満の一因となっていると考えられる。

⑥改善の方向性

・1 学期、児童会で「相手の気持ちを考えよう」というテーマでアンケートを実施し、いじめをなくす呼びかけを行った。保護者については、「いじめ」について、単独でアンケートを実施し、学校の取り組みが不十分と捉えられている背景をもう少し明確にしていく必要がある。また、発生したいじめ問題について児童が納得する指導、あらゆる機会を通して保護者への情報提供に努める。
・これまで学級集団作り、道徳、人権学習、PTA 人権参観授業等で意識の向上を図ってきている。さらに「いじめ対応プログラム」や「こころのノート」等を使用し、道徳の時間に組織的に取り組んでいく。
・児童の状況把握を意識的に取り組む必要がある。児童の様子を日常的に把握しタイムリーな面談とともに別途意識的・意図的な「面談」等も行い、「いじめをなくそうとしている。」「子どもの様子を把握しようとしている。」という強い姿勢をアピールし、取り組みの充実を図る。
・「いじめ」対応のシステムを明確にし、学校全体での取り組み、保護者と連携した取り組み、保護者への情報の提供の現状のありよう等の見直しと改善策を進める。
・「いじめ防止週間」「よいところ見つけ週間」等児童会活動を通していじめをなくす意識的な取り組みを継続する。「いじめをなくす」をテーマにした児童会の劇を朝会時に行っていく。

学校関係者評価

・「いじめ」に早期に気づくことができる体制作りが必要。日ごろから子どもへの話しかけは大切だが、普段と違う様子があればすぐ話しかけるなどを実践してほしい。教職員集団としての対応も必要。
・次年度には体制作りとしての「いじめ」対応システムを明示してほしい。
・いじめをしている側の保護者への情報提供なども丁寧に対応することが大切。

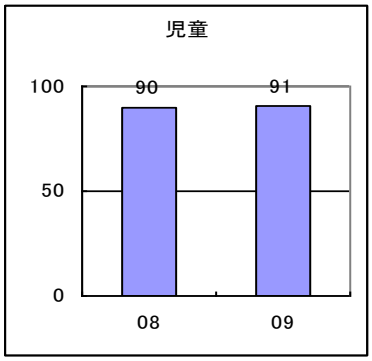
| | |
|---|---|
| ①テーマ | 「心育て」　B 規律について |
| ②昨年の指摘 | ・生活規律や学習ルールの確立の取り組み中で、児童・保護者への信頼関係を深めるようにされたい。<br>・「いけないこと」に教職員がすぐに対応できているか点検してほしい。また、児童が納得する指導は大切であり、手立てや判断基準について、教職員間はもとより保護者・児童とも交流しておくことが必要。<br>・「継続する」実践は大切であるが、新しい発想での取り組みや行為の背景や気持ちを把握した上での指導も大切である。 |

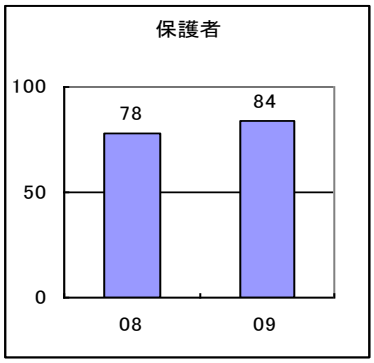
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 仲間と共に育つ豊かな心を育てる<br>身近な指導から環境教育や豊かな心の育成を目指す。<br>○朝食アンケート学校生活アンケートの実施。<br>○児童会活動や専門部活動を生かし、具体的な実践的態度を育てる。<br>○地域の方やボランティアの方との交流や活動を通して経験を豊かにしたり生活を見直したりする。 | ○朝食アンケート学校生活アンケートの実施と集約、給食だよりによる公開と指導。<br>○児童会で、仲間作りやいじめをなくす目標や生活の中で守るべきルールを決め、児童朝会で訴え、全校で取り組んでいる。児童会新聞等で取り組みの様子も紹介。<br>○また、登校指導として従来の学期はじめの朝の登校指導を発展させ２学期より月初めの朝の１週間登校指導をしている。<br>○登校指導を毎月実施。下校指導も適時実施。<br>○地域ボランティアの方の登下校の見守りや放課後活動等での地域ボランティアの方との交流 |

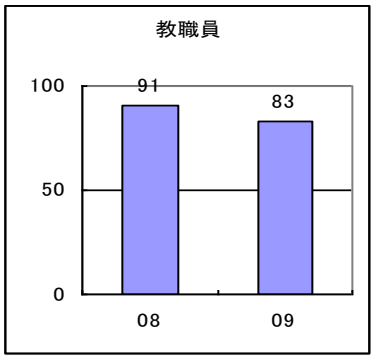
自己評価

⑤自己診断

| 小学校 | 年度 | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (3-3)先生たちは学習ルールや生活のきまりをしっかり教えてくれる。 | 90% |
| | 本年度 | | 91% |
| 保護者 | 前年度 | (3-3) 学校は学習や生活の決まりをしっかり指導している。 | 78% |
| | 本年度 | | 84% |
| 教職員 | 前年度 | (3-3)学校は学習のルールや生活のきまりをしっかり指導できている。 | 91% |
| | 本年度 | | 83% |




・児童はほぼ横並びの９割台で、保護者は 6%の増で８割半ば。取り組みに対して一定のプラス評価があると言える。
・反面、教師の指導の統一性の不十分さを指摘する意見や見方もある。取り組みの点検と組織的、継続的取り組みの大切さを示唆している。
・登下校指導、見守りについては学校支援ボランティアの人たちの活動、また連携を評価する意見は多い。
・児童会で生活目標を決め取り組んでいること、児童朝会や児童会新聞で情報を提供していること、目標の掲示等が功を奏していとも考えられる。
・家庭教育アンケート結果から生活リズムや生活習慣を見ると、テレビ視聴時間、就寝時刻、家庭学習、読書等について課題が見受けられる。

⑥改善の方向性

・指導の統一性を図るために、教職員用チェックシートの作成、取り組みに関わる情報を HP や学校便り、学級通信等で保護者へ提供していく。「よいことは褒め、よくないことには『よくない』と毅然とした態度での指導」を家庭と協力して、児童が納得するよう粘り強く進める。
・児童会の取り組みとして、「学校のルールを守ろう」と呼びかけているが、「廊下を走らない」は守られていない。ルールについて振り返りカードを使用して自分を振り返ることを促している。また、今後児童用のポスター作成・掲示等児童会活動や自己評価活動に関わる取り組みをさらに推進していく。
・学習のルール等について教室等に掲示し励行に努める。
・自らや集団のありようを児童自身がじっくり見つめ直す指導を大切にし、指導事項や指導について納得を得るよう努める。
・「挨拶運動」「念入り掃除週間」等を学校と家庭との連携、小中連携、児童会活動等により取り組む。

学校関係者評価

・取り組みの継続を望む。
・生活規律や学習ルールの確立の取り組み中で、児童・保護者への信頼関係を深めるようにされたい。
・「いけないこと」に教職員がすぐに対応できているか点検してほしい。また、児童が納得する指導は大切であり、手立てや判断基準について、教職員間はもとより保護者・児童とも交流しておくことが必要。
・「継続する」実践は大切であるが、新しい発想での取り組みや行為の背景や気持ちを把握した上での指導も大切である。
・ルールの振り返りカードの活用の工夫を進めてほしい。

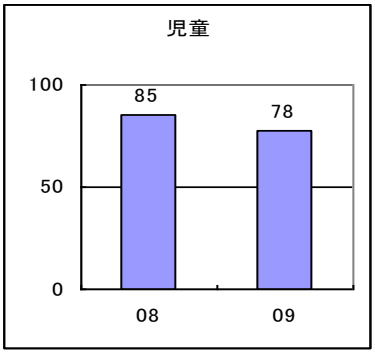
## 自己評価

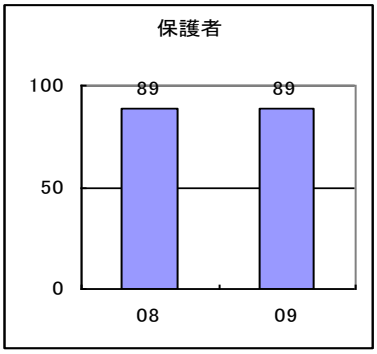
| | |
|---|---|
| ①テーマ | 「心育て」　C 挨拶について |
| ②昨年の指摘 | ・児童会と教職員が一体となって「挨拶運動」に取り組み、一人ひとりが心を開きあって接しあう雰囲気を作ろうとしている。<br>・小中が連携して取り組んで成果が上がっている。今後もこのとりくみを継続してほしい。<br>・児童に主体性を持たせる取り組みは、児童の意欲を高める。こうした取り組みを生活や行動に関わる分野で、そしてさらに他の分野でも生かしてほしい。 |

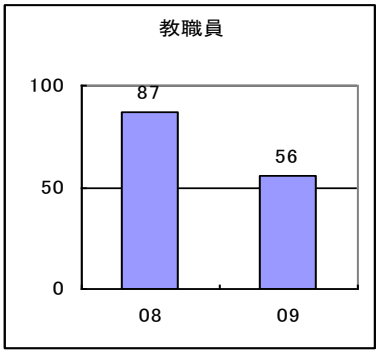
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 仲間と共に育つ豊かな心を育てる<br>挨拶から繋がる<br>○朝の挨拶運動を実施する。(指導者が率先してやってみせる。児童会の挨拶運動・小中同時期に) | ○毎月、月初めに挨拶運動・登校指導を 3 日間行っている。地域の各ポイントに指導者が交替で立ち番指導を行っている。また、７：５０－８：１５に児童会役員及び学級代表、担当教員等が旗を立てて校門で「あいさつ運動」を実施している。地域保護者の方からも挨拶する児童が増えていると評価いただいている。今後も継続実施していく。 |

### ⑤自己診断

| 小学校 | 年度 | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (1-5)朝の挨拶運動は、役立っている。 | 85% |
| | 本年度 | | 78% |
| 保護者 | 前年度 | (1-5)学校は、小中が連携してとりくんでいる朝の挨拶運動等で子どもたちの意識を高めている。 | 89% |
| | 本年度 | | 89% |
| 教職員 | 前年度 | (1-5)学校は、小中が連携での朝の挨拶運動等で児童の意識を高められている。 | 87% |
| | 本年度 | | 56% |




・児童は 7%減で 8 割を切る。保護者は横ばいで 9 割弱。他地域に比較すると児童が地域の方に挨拶をよく行っているという評は聞こえてくる。児童にも朝会や学級通信等で伝えている。そうしたことが保護者の評価に表れていると思われる。
・しかし、一方に登校班の上級生が下級生に対して挨拶を行っていないという指摘もある。上級生の言動は下級生の見本となるが、一部にはその意識が弱いとの声もある。
・児童の評価の減は、「挨拶運動」時の児童会役員などの取り組み姿勢に対する批判もあると思われる。児童の意見の中に、「挨拶をしても（役員などから挨拶が）返って来ないことがある。」「(役員などの挨拶の）声が小さい」といったものがあった。そうしたことから「挨拶運動は意味がない。」とする短絡的な捉え方の意見もまま見受けられるので、児童の意識の把握と指導が必要である。

### ⑥改善の方向性

・朝や放課後等教職員が意識的に率先して挨拶や声掛けを児童に対しても教職員同士でも行う。
・挨拶をしないなど気になる対応の児童に対しては、担任が面談や保護者との連携を行う等して児童理解に努め、問題の解決を図る。
・「挨拶運動」における児童会のリーダー性は尊重しつつも、①高学年は役員以外も含めてリーダーを編成する。②児童朝会時に「各クラスに挨拶リーダーを割り振る」等リーダー割り当て対象を広げていく工夫する。
・登校班においては、登校班長会議を定期的に開き、挨拶や登校の様子について確認・指導をしていく。また、PTA 地区委員の協力を要請し、集合場所での挨拶を励行していく。
・挨拶運動のポスターや標語募集・掲示等を児童会活動として工夫していく。
・小中連携での「挨拶運動」を実施していく。

## 学校関係者評価

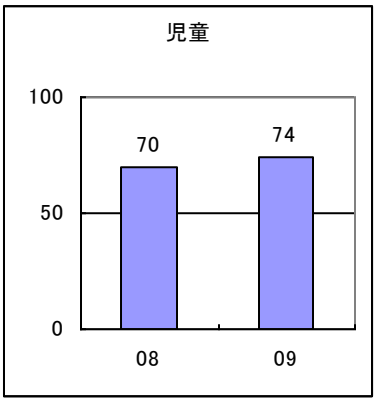
・学校でも、家庭でも、地域でも挨拶をしていく取り組みが大切。家庭内でも挨拶運動の取り組みをしてほしい。
・挨拶をしない、しなくなったということにも気を配り、その理由を考えて取り組むことなどを大切にしてほしい。挨拶をしなくなったときこそ要注意である。

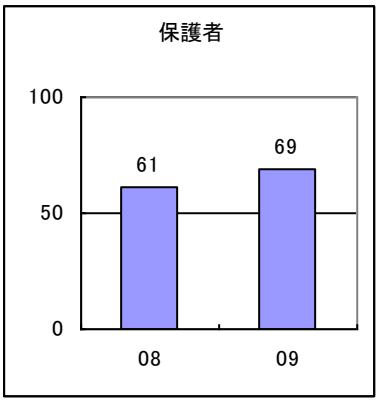
| | | |
|---|---|---|
| 自己評価 | ①テーマ | 「心育て」　D 悩み・相談について |
| | ②昨年の指摘 | ・子どもが話しやすい雰囲気作りを学校はもっと進める努力が必要である。<br>・教職員は常に子ども一人ひとりを見つめ、細かく観察するなかから、子どもの悩みを把握できるように積極的に働きかける努力をしてほしい。 |

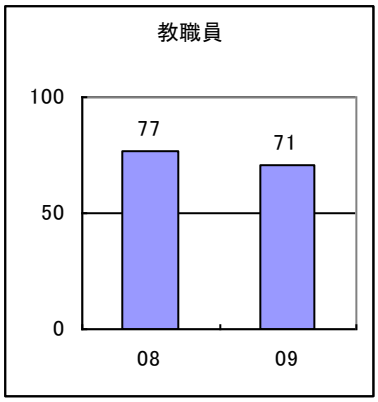
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 仲間と共に育つ豊かな心を育てる<br>お互いのよさを認め合い、集団・社会のルールを大切にする児童を育てる。<br>人権教育を全ての教育活動の基盤において取り組む。 | ○挨拶等から児童の様子の把握に努めたり、声掛けを意識的に行ったりしている。<br>○面談も意識的に取り組むことを確認している。<br>○「トトロの部屋」等相談活動の継続 |

⑤自己診断

| 小学校 | | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (3-1)なやみや体のことを相談しやすい先生が学校にいる。 | 70% |
| | 本年度 | | 74% |
| 保護者 | 前年度 | (3-1)学校には、悩みや心身の健康等を相談しやすい先生がいる。 | 61% |
| | 本年度 | | 69% |
| 教職員 | 前年度 | (3-1) 学校は、児童や保護者が悩みや心身の健康等を相談しやすい状況にできている。 | 77% |
| | 本年度 | | 71% |




・児童 4%増で 7 割半弱、保護者 8%増で 7 割弱、評価が多少増えつつも、十分な肯定的評価とは言いがたい。また、「相談しやすい先生がいるとは思わない」児童が 8%、保護者が 3%いるということは重く受け止めなければならない。
・「(悩みに対する) 学校の対応がよく分からない。」という保護者の意見や「悩みなどの相談を積極的に」「相談したくてもできないときがある。」という児童の意見から、「何でも、いつでも何かあれば相談してほしい。話を聞かせてほしい。」といった姿勢を学校・教師に感じ取れていないということがあることが分かる。
・「本当に相談したければ来るはず」という教師の姿勢に対しては、「相談しにくい」と感じているのだろうと想像できる。
・高学年においては担任が異性の場合は相談しにくいという傾向が出ていると思われるが、そうしたときにおけるケアやマニュアルが不足していると思われる。
・この項目と「先生は、話し合ったり決めたりするとき、子どもたちの意見や気持ちを聞いてくれる。」「先生たちは、いじめやこまっていることについてきちんと助けてくれる。」の項目に共通性が見られるものと捉えている。

⑥改善の方向性

・「悩み」など「相談しにくい」と感じていることや要望について、具体的に把握する必要がある。児童、保護者アンケートを実施し学校の取り組みを改善していく。
・児童の様子を日常的に把握する分とは別に意識的意図的に「面談」などを行い、「困っていることや悩みはないか把握しようとしている。」という強い姿勢をアピールすることが必要であり、取り組みの充実を図る。「先生が私を見ていてくれる」という信頼関係を築き上げていくよう努める。
・「あのね帳」や日記、「もやもや書き」等の取り組みを通して児童の日常の様子を丁寧に把握する努力を積み重ねる。
・特別なことがなくても指導者の方から児童に積極的に声掛けをし、チェックシートなどに記録し児童へのはたらきかけの状況を確認する。また、ロールプレイ等を取り入れ子どもたちに相談の仕方を具体的にわかりやすく教える。
・通信や連絡帳、HP 等で学級の様子を伝え、気になることがあれば電話連絡・家庭訪問などですぐに対応し保護者と協議する。
・カウンセラーなどの専門家に授業やアドバイスを受ける研修の設定をする。
・子どもや保護者の思いを日常的に受けとめる窓口（保健室や「トトロの部屋」等）の利用を伝えていく。
・第三者機関による「相談しやすい」状況づくりを教育委員会等外部関係機関と協力して進める。
・児童会で「悩みをだれかに伝えよう」企画などに取り組む。

学校関係者評価

・ジャッジだけでなく、経過を見つめることを大切にしてほしい。・内外に相談システムを示し、児童や保護者によく分かるようにしていく。
・カウンセリングマインドで対応することが大切。スクールカウンセラーなどによる研修を行い教職員の力を向上してほしい。
・保護者がどのように考えているか知ることが大切。保護者と教職員の話し合いを多くしてほしい。また、保護者同士の関係も大切である。
・教職員が悩みなど相談できることも大切。職場の風通しのよさが大切である。

（２）知力育て※



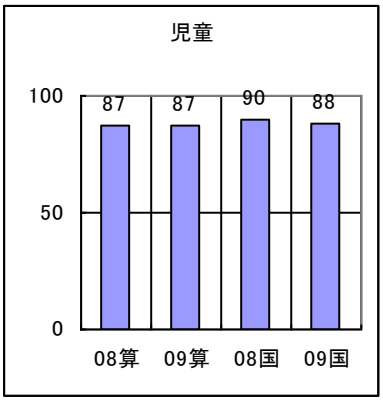
自己評価

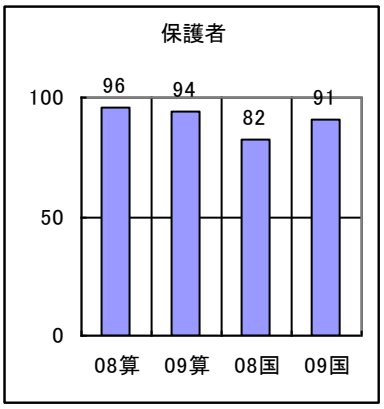
| | |
|---|---|
| ①テーマ | 「知力育て」A 学習指導について |
| ②昨年の指摘 | ・個々の児童の実態に寄り添った、よりきめ細かな指導内容、指導方法を実施されたい。<br>・国語の力をどのようにして高めるかについて学校全体の方針が明確になっていないのではないか。<br>・学校の取り組みのポイント、統一した視点、指導方針を保護者にしっかり伝える努力や工夫が必要だ。 |

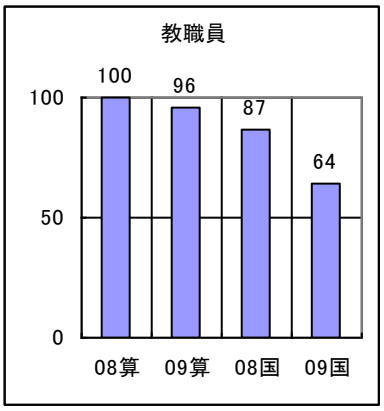
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 学力の向上を目指し、学習における基礎・基本の定着を図る。定着と学力アップを目指す<br>○授業改革を進め、児童が意欲的に取り組む態度を育てる。<br>・少人数指導・習熟度別指導<br>・授業評価、自己点検・自己評価<br>○文章を読み取る力の向上<br>・国語力の向上研究授業を実施する。（年・３回予定）<br>○学力診断テストと学力実態分析を実施する。<br>・算数、国語の実態テスト及び意識調査<br>○班活動と学習ルールの確立に向けて取り組む。<br>○・朝タイム、放課後、長期休業中の活用<br>学年団で実施　学習習慣、自学習の定着<br>○全学年の音読カード使用<br>各学年で音読カードを作成し宿題として実施する。<br>○外国語活動の充実<br>・5・6 年（外国語活動）<br>・1～4 年（学校行事） | ○授業改革<br>・3 年以上：習熟度別授業の展開（30%前後目安）<br>・研究授業、PTA 授業参観時に授業評価実施<br>・授業の振り返り実施（クラスによって違いがある）<br>○説明文の研究授業（年 3 回）<br>○習熟度別指導に関わる研究授業（7 次中心 3 回以上実施済み）<br>○学力実態調査、躓き調査の実施。国・府の学力調査実施<br>・結果を分析・交流し日常の取り組みに生かしている。<br>○朝タイムの活用：朝の学習タイムの実施時間 8：35-8：50<br>朝国語（水）朝計算（木）朝読書（月・金）学年団で取り組む。<br>○宿題チェック、音読の家庭学習、昼休みタイム等での個別学習。<br>音読は、保護者の協力がある場合は効果が上がりやすい。<br>○学習ルールの徹底を継続中<br>・聞く・挙手・わからない時は意志表示する。・仲間と関わる方法や言葉について指導する。チャイムで行動する。など継続指導中<br>○読書：一定冊数読破毎にしおりを渡して励ましている。<br>○放課後学習、夏休みの学習室開放、業間・昼休みの個別補充学習等に取り組んでいる。<br>○担任と ALT による TT による英語活動の充実。教職員研修の推進 |

⑤自己診断

| 小学校 | | 項目 | 番号 | A+B |
|---|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (2-1)算数の授業はよく分かる。 | | 87% |
| | 本年度 | | | 86% |
| | 前年度 | (2-2)国語の授業はよく分かる。 | | 90% |
| | 本年度 | | | 88% |
| 保護者 | 前年度 | (2-1)学校の算数の少人数指導（習熟度別・分割・TT 等）は、学力向上に役立っている。 | | 96% |
| | 本年度 | | | 94% |
| | 前年度 | (2-2)学校の国語の少人数指導（習熟度別・分割・TT 等）は、学力向上に役立っている。 | | 82% |
| | 本年度 | | | 91% |
| 教職員 | 前年度 | (2-1)学校は、学校の算数の少人数指導（習熟度別・分割・TT 等）で児童の学力を効果的に向上させている。 | | 100% |
| | 本年度 | | | 96% |
| | 前年度 | (2-2)学校は、国語の少人数指導（習熟度別・分割・TT 等）で児童の学力を効果的に向上させている。 | | 87% |
| | 本年度 | | | 64% |




・児童は「わかる」ということについて、算数は 1%減の 86%、国語は 2%減の 88%。「分かる」という感覚と「分かっている」実態とは必ずしも一致しているわけではないが、ポイントが下がっていることは、習熟度別指導や分割指導が十分効果的に機能できないところもあると思える。

・保護者は、算数 2%減の 94%、国語は 9%増の 91%。システムそのものに高い期待感が伺え、取り組みにもプラスの評価がある。

・国語は昨年度から 3 年生以上で少人数指導、習熟度別指導を展開している。昨年度は本格的に実施した学年は少なかったが、本年度は対象学年全てで実施している。それに対する一定のプラス評価がなされたものと考えられる。

・国語に関わって教職員評価が低いのは、効果的な指導方法を検証中であり、まだ十分な達成感が得られていないためであり、「未完成」と自覚している表れであり、今後さらに充実した内容にしていきたい。

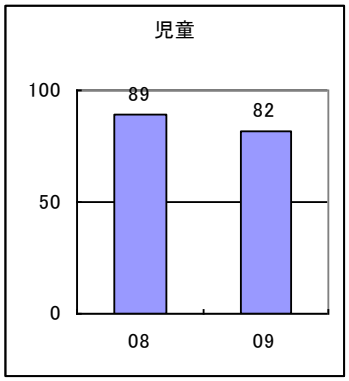
| | | |
|---|---|---|
| | ⑥改善の方向性 | ・国や府、校内学力実態調査、躓き調査等を実施し、その分析結果を少人数指導、習熟度別指導に効果的に反映させることができるよう、授業形態、方法等の研究を進める。<br>・学びを生かす授業の研究を研究授業や授業研究を通して進める。<br>・少人数指導、習熟度別指導等個に応じた指導の充実を図る。<br>・反復学習や家庭学習の習慣、自学習の定着を家庭や地域と連携して進める。<br>・読書指導を家庭と連携して進める。 |
| 学校関係者評価 | ・児童によって習熟度に違いがある。反復学習を充実し、児童が達成感を持つことを大切にした取り組みを進めてほしい。<br>・目標を高く掲げ、教職員が一致して取り組みを継続し、成果が上がるように進めてほしい。 | |

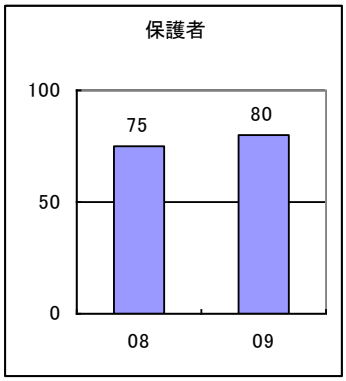
| | | |
|---|---|---|
| 自己評価 | ①テーマ | 「知力育て」B通知票について |
| | ②昨年の指摘 | ・学校は、評価基準や評価資料についての説明を保護者にもっと明確に示す必要がある。<br>・学校は、児童が頑張ったところ、また励みになる言葉等をしっかり書き、教師が捉えてる。<br>・子どもの実態を知らせると共に子どものやる気を引き出す評価に努めてほしい。 |

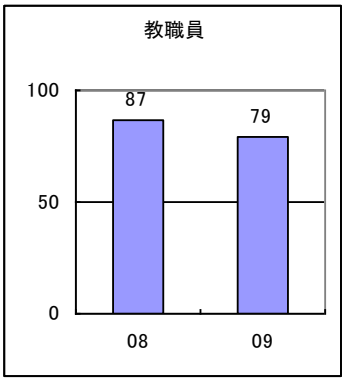
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| ○学年団及び学校全体で評価規準、判断基準の共通認識を図る。<br>○研究授業において授業評価実施。<br>○各種授業参観において授業評価を実施する。<br>○学力診断テストと学力実態分析を実施する。 | ○学年及び学年団で評価規準、判断基準を設定し、全体で交流を図っている。<br>○授業アンケートによる保護者の評価を授業改善につなげる努力をしている。<br>○分割及び習熟度別授業において授業のねらい及び到達度評価の共通認識を図っている。<br>○学習ルールの徹底を継続中<br>・最後まで話を聞く。・手を挙げて発表する。・わからない時は意志表示する。・仲間と関わる方法や言葉について指導する。チャイムで行動する。等 |

⑤自己診断

| 小学校 | | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (2-4)通知票（あゆみ）で自分のがんばりがよく分かる。 | 89% |
| | 本年度 | | 82% |
| 保護者 | 前年度 | (2-4)通知表の評価や記録は適切で分かりやすい。 | 75% |
| | 本年度 | | 80% |
| 教職員 | 前年度 | (2-3)学校は、通知表（あゆみ）の評価や記録を児童や保護者にとって適切で分かりやすいものにできている。 | 87% |
| | 本年度 | | 79% |




・児童は7%減、保護者は5%増で、両方とも8割程のプラス評価。
・保護者の意見に「通知表の評価は5段階にしてほしい。保護者の意見を重視しすぎだと思う。」「本人の頑張りとは別の評価がされている場合があれば、説明を聞く場・機会を持ってほしい。」というものがあり、評価のありようについて十分説明責任が果たせているとは言いがたい面があることが分かった。
・学習内容の定着には家庭学習が必須であり、保護者の協力を得なければならない面も大きい。本校の児童の実態において、「学びの基礎」に関わる課題が大きい。学期のまとめの評価とは別に単元毎等の形成的評価を提示していくことが必要と考えられ、それによって保護者の協力も得やすく、家庭学習の充実、基礎基本の定着に効果が期待される。

⑥改善の方向性

・評価のありようについてもう少し詳しく保護者の意見・要望を集約し、評価・通知票の改善に努める。
・形成的評価や単元毎の評価の実施について研究を深め、具体化していく。
・評価研究を深め、通知表の改善を進める。

学校関係者評価

・評価のシステムや規準を明確にし、保護者や子どもに分かりやすいようにしていく努力が必要である。評価基準や評価資料のあり方等についても保護者に明確に示してほしい。

（３）体育て※

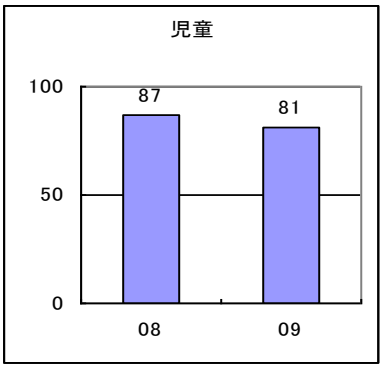


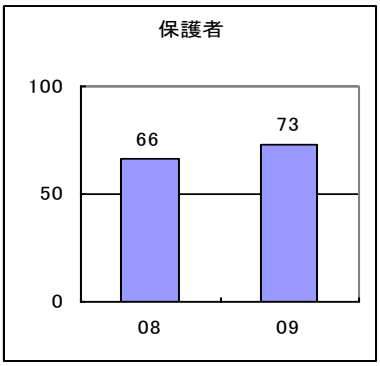
| | |
|---|---|
| ①テーマ | 「体育て」A 学習指導について |
| ②昨年の指摘 | ・強い体力が知力や精神力を支える面もある。また、集中力を養うのにも体力は基本的に重要なことであるから、取り組みを充実するよう努力してほしい。<br>・ジョギングや縄跳びもよいが、毎日続けて行えるものも検討してほしい。 |

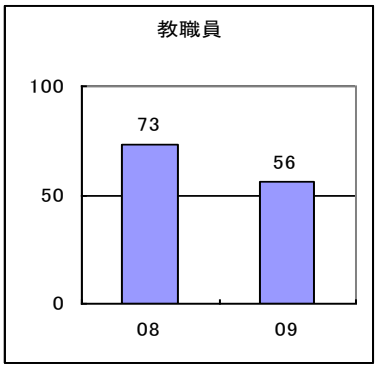
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| 命や体を大切にし、生活の向上を目指す児童を育てる<br>○心身の健康・食・安全について考え、スポーツを楽しむ児童を育てる。<br>・遊びや体育などの活動を通して基礎体力を高める。<br>・食の安全・食生活・楽しい食事等についての指導<br>・登下校や学校内における安全な行動や避難の方法について考えるとともに、その方法や技術を身に付ける。 | ○教科体育指導の充実<br>・5 年体育の小中連携による指導<br>・水泳指導時間の確保・増時間<br>○生活アンケートの実施<br>・朝食アンケート実施<br>・生活や食生活の改善指導<br>・学級懇談、学級通信等での情報提供と啓発<br>○給食を活用した食生活の向上<br>・ランチルームの活用<br>・交流給食<br>・「豊能町を食べる日」給食試食会・給食講演会<br>○竹馬、縄跳びチャレンジカードによる活動の推進。<br>・竹馬、長縄の貸し出し<br>・ジョギングタイム、縄跳び朝会<br>○安全指導<br>・避難訓練、登下校指導、地区児童会、交通安全教室、非行防止教室等 |

⑤自己診断

| 小学校 | | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (2-3)体育や行事で運動する力がよく伸びている。 | 87% |
| | 本年度 | | 81% |
| 保護者 | 前年度 | (2-3)学校は子どもたちの体力を高めるためにしっかり取り組んでいる。 | 66% |
| | 本年度 | | 73% |
| 教職員 | 前年度 | (2-3)学校は、児童の体力を高める効果的な取り組みができている。 | 73% |
| | 本年度 | | 56% |




・児童は 6%減の 8 割強、保護者は 7%増の 7 割強。保護者の評価ポイントの増は、ジョギングタイムや縄跳び朝会を昨年度後半からの取り組みに対するものだろうと推察される。一方、児童の減の背景には、取り組みはあったものの、一つ一つの取り組みが全校的な盛り上がりにならなかったことや取り組み期間が短かったことなどから記録が伸びなかったり達成感が持ちにくかったりした結果ではないかと推察される。
・また、5 年の体育は小中連携による指導で、中学校の教師の指導や中学校の施設での体育も実施した。これは、児童の好評価を得ている。しかし、全体的傾向として高学年の評価は低、中学年に比するとやや低い。
・保護者の意見には「体力づくりをもっと強化してほしい。」「遊びも運動も少ないように思う。」「土曜日に体育館やグラウンドを開放して」といったものがある。全体的に評価がそう高くないのは、全体的・継続的に取り組んでいることがない、あるいは東能勢小学校独自の体育カリキュラムがない等のためもあると考えられる。
・日常の体育の授業においても自分の記録の伸びを継続的に確認したり自己目標を持って達成感を味わったりできるよう取り組みの充実が必要である。

⑥改善の方向性

・教科体育の充実を図る。体育カリキュラムの系統化、具体的手立てや指導方法等について研究を深めるとともに実技研・授業研を行い、指導の交流を図るなど指導技術を高める。
・1 年間を通して継続的に取り組む全校的なプログラムを設定し、体力向上に努める。こうした取り組みを全校にアピールし、また進級カードの活用や体育集会を設定し、児童の意欲を高めていく。
・運動の基本である「走力」の向上にあらゆる機会・場を通して高めていく。
・小中連携により教科の専門的な面も深める。
・水泳指導を組織的に取り組み、泳力を伸ばす。

学校関係者評価

・体力向上のカリキュラムを作成し、研修を深め、保護者や子どもにシステムや内容を示していくことが大切である。
・年間を通した取り組みが大切である。子どもたちにやっていきたい体力向上メニューを作らせるなどして、年間の取り組みのプログラムを作り、全校で進めていく。取り組みについて「うれしい」「楽しい」等を進級表として表現できるよう工夫に努めてほしい。

## （４）小中連携



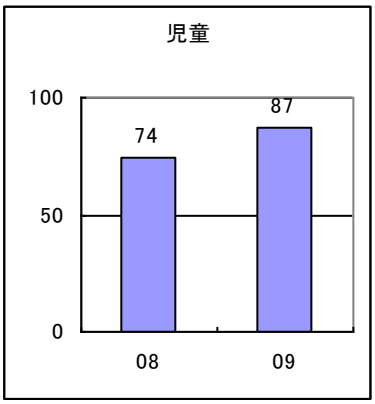
| | |
|---|---|
| ①テーマ | A 小中連携について |
| ②昨年の指摘 | ・システムとしては評価できるが、具体的な実施方法をさらに研究されたい。<br>・学校は、子どもたちの実態をしっかり把握し、実態に則した学習指導に努めてほしい。<br>・担当者間の話し合い等で改善されてきたところもあるが、指導者は、子どもがやる気を出す細やかな配慮をする努力も必要である。<br>・小学校教員による中学校での数学授業の効果のありようについても確かめておく必要がある。 |

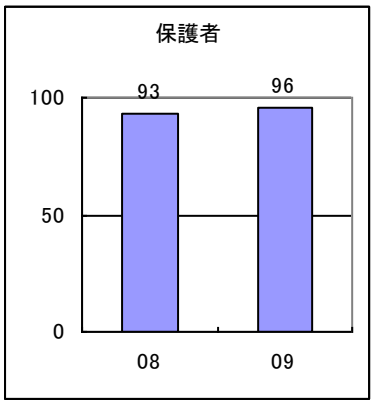
| ③今年度重点的な取り組み | ④進捗状況 |
|---|---|
| いきいきスクールの継続による小中の学習の円滑な継続と豊かな学習経験を図る。<br>○小中の段差解消<br>○教科指導の専門性からの充実<br>○義務教育の９年間の流れと小中の交流 | ○「いきいき」スクール：6 年外国語活動（担任、ALT、中学校教員での TT）6 年社会科（担任、中学校教員での TT）5 年体育（担任、中学校教員での TT）<br>○挨拶運動や児童生徒指導、緊急対応の交流<br>○小中の研究授業、参観授業の交流<br>○小中教職員交流会の実施。<br>○６年生が中学校での授業やクラブ体験、中学生による入学説明 |

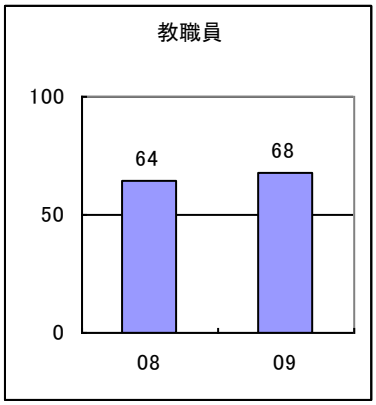
**自己評価**

**⑤自己診断**

| 小学校 | | 項目 | A+B |
|---|---|---|---|
| 児童 | 前年度 | (1-4)これからもいろいろな中学校の先生に教えてもらいたい。 | 74% |
| | 本年度 | | 87% |
| 保護者 | 前年度 | (1-4)中学校の先生が 6 年生に社会や英語、5 年生に体育など教科を教える小中連携は、よいシステムである。 | 93% |
| | 本年度 | | 96% |
| 教職員 | 前年度 | (1-4)学校は、小中連携（授業や体験、交流等）をよいシステムとして効果的に機能させている。 | 64% |
| | 本年度 | | 68% |




・児童は 13%増、保護者は 3%増。これは小中連携の「いきいき」授業がプラス評価を得た結果であると思える。今年度の 6 年の外国語活動は、小学校担任・中学校担当者・ALT の三者が打ち合わせを行い、授業も協力して行っている。また、5 年体育は小中 TT で中学校担当者の指導を受けたり、中学校で授業をしたりしている。また、社会科の授業では児童の興味や関心を大切にする工夫した授業が展開されている。
・「いきいき」授業のシステムについては、保護者の今日的な要望に応えるものであり、なおかつその期待に応える実践が一定展開できていると考えられる。
・研究授業や参観授業の交流、小中教職員交流の回数は少なかった。教職員の交流は、ねらいを絞って行ったことにより、相互理解が前進した。

**⑥改善の方向性**

・小中連携「いきいき」授業については今年のよい点を継続していく。
・授業及びクラブ体験、入学説明会、朝の挨拶運動、緊急下校訓練等小中交流の行事の充実を図る。また、6 年だけでなく他の学年にも広げることや、交流を早い時期に行うこと等も検討していく。
・研究授業や参観授業の交流、小中教職員交流についてさらにねらいを明確にするとともに回数も増やし、小中で組織的に取り組みを進める。

**学校関係者評価**

・小中連携システムは相互に刺激をもたらす取り組みであり、長期のカリキュラムを共に共有しながら取り組んでいくことが大切である。長期的なカリキュラムを明確に示すべきである。
・小 6、中 1 の接続は組織的課題であり取り組みの充実が期待されている。